幽斎玄旨

佐藤雅美

文春文庫

文春文庫

©Masayoshi Sato 2001

定価はカバーに
表示してあります

幽斎玄旨（ゆうさいげんし）

2001年12月10日　第1刷

著　者　佐藤雅美（さとうまさよし）

発行者　白川浩司

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23　〒102-8008
TEL 03・3265・1211
文藝春秋ホームページ　http://www.bunshun.co.jp
文春ウェブ文庫　http://www.bunshunplaza.com

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本　　Printed in Japan
ISBN4-16-762704-3

文春文庫

幽斎玄旨

佐藤雅美

文藝春秋

幽斋玄旨

目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　将軍弑逆（しいぎゃく）　9
第二章　矢島の里　37
第三章　流浪の果て　65
第四章　天下布武　91
第五章　岐阜への使い　117
第六章　あしき御所　145
第七章　裏切り者　171
第八章　さかむ日数　199
第九章　泥足の使者　227

第十章　袖の露　253
第十一章　孫娘於長（おちょう）の縁談　281
第十二章　恩讐（おんしゅう）の彼方　307
第十三章　大徳寺山門の木像　335
第十四章　死地への使い　361
第十五章　秀吉狂乱　387
第十六章　家康の礼　415
第十七章　田辺籠城　443
参考文献　470

幽斎玄旨

第一章　将軍弑逆（しいぎゃく）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一

昨夜来の雨音を掻き消すように蹄の音が近づいてくる。どうやら我が屋敷を目指しているらしい。馬が一声高くいなないて止まる。

何事だろう？

藤孝は読みかけていた書から目を離した。

廊下を、近習が急ぎ足でやってきてひざまずく。

「一大事にござります」

生まれてこのかた一大事の連続だ。ずーっと一大事の渦中にいた。少々の一大事には驚かない。

「さあて、どんな一大事かな？」

藤孝は顔をゆっくり近習に向けた。

「松永弾正と三好三人衆の一万五千の軍勢が、公方様のおわします二条勘解由小路武衛屋敷に押し寄せ、蟻の這い出る隙間もないほどに取り囲んでいる由にござります」

松永弾正少弼久秀と三好三人衆といえば三好党だ。三好党と公方様こと将軍は和し

て久しい。

ありえないことだ、とばかりに藤孝は首を捻った。

近習は目を吊りあがらせて続ける。

「軍勢は口々に、公方様を弑し奉るのだと申しているそうにござります」

「真か？」

「はい」

将軍が臣下に弑逆された事件は過去にもあった。六代将軍義教が、播磨・美作・備前三国の守護大名赤松満祐に、猿楽の宴を催すとて、西洞院二条の屋敷に招かれて殺されたという事件である。

しかしあれは六代将軍義教にも非があった。守護大名赤松満祐にはそれなりの理由があって、止むに止まれずに手を下した弑逆といえなくもない。

松永久秀と三好三人衆は、将軍の臣下の臣下の、そのまた臣下だ。そんな男たちに、止むに止まれぬ、それなりの理由などない。

まてよ。

松永久秀は、主君の三好長慶をも、三好長慶の嗣子義興をも毒殺したと噂のある、下剋上を地でいく男だ。〝自分にとって都合のいい悪い〟が物差しで、自分の都合のためならどんなことでもやりかねない。

邪魔だから、気に食わないから、目障りだから、思うがままにならないから、などの

自分の都合で、将軍を弑逆しようと思い立ったのかもしれない。

だとすると一大事どころではない。驚天動地の出来事だ。

「いかがなされます？」

近習が指示をうながす。

ひところと違い、いま京は平穏だ。将軍の身の周りに常時仕えて弓矢を持って戦える者は三十人ばかり。武衛屋敷は広いとはいえ、板葺屋根の築地塀。乗り越えるなどいとも容易い。一万五千の軍勢に攻め入られたらひとたまりもない。あるいはすでに将軍は命を奪われているのか。

いやそれでも天下の将軍だ。命を奪うなど恐れ多い。一万五千の大軍で示唆し、何事か要求を突きつけているのかもしれない。そういうことだと、間に入っていくらでも話のつけようはある。

いずれにしろすぐに駆けつけねばならない。

藤孝は珍しく気を高ぶらせて叫んだ。

「馬を引け！」

ここは城州長岡の青龍寺城。城といっても土塁を掻き上げて周りを囲っただけの、構えはありふれた土豪の屋敷だ。支配する土地もわずかに三千貫。養う家来も四十人余にすぎない。

藤孝は素早く甲冑に身を固め、馬に跨がって、

「それっ」
と鞭を入れた。
とっさのことで、全員でというわけにいかない。家来は二十騎ばかりが付き従った。
将軍が取り囲まれている二条勘解由小路武衛屋敷は内裏のすぐ西に位置する。長岡からだとおよそ三里。馬を飛ばせば半刻（一時間）とかからない。
息切れしないように日ごろから責めている馬は、鞭を入れなくとも気持ちよく駆ける。
「あれは」
桂川を渡ったところで、家来の一人が、手にしている鞭で指す。
笠も被らず、梅雨の冷たい雨に打たれながら小走りにやってくるのは、一条戻り橋の屋敷に詰めている小者の一人だ。
「おーい」
家来が声をかけると、気づいて近づいてくる。
「これはこれは御屋形様」
小者は辞儀をする。
「松永勢と三好勢が武衛屋敷を取り囲んだということだが？」
藤孝は逸る馬の手綱を引き絞りながら聞いた。
「おっしゃるとおりで、わたしも噂を聞いて武衛屋敷に駆けつけ、遠目に様子を窺うとりました」

「奴らが武衛屋敷を取り囲んだのは何刻ごろのことだ？」
「辰の下刻（午前九時）やそうでございます」
およそ巳の下刻（午前十一時）になろうとしている。すでに一刻（二時間）が経っている。
「それですぐにも攻め入るのかと思って見ておりましたら、まあまあ情けはあるようで、奥方様など御上臈方を落とされたりと手間をかけておったのですが、さきほどとうとう築地塀を乗り越えて屋敷に攻め入りました」
「やはり狙いはお命だったか」
「それで早いとこ御屋形様にお知らせしなければと青龍寺に向こうとった次第で、振り返ると雨やいうのに火の手があがっとりました」
家来の一人が口を出す。
「するともはや公方様のお命は」
小者は首を振る。
将軍とは、将軍が十一、己が十三の歳から、かれこれ二十年近くも苦楽をともにしてきた。将軍を中心に生きてきた。将軍のいない人生など考えられない。また考えたこともない。これからどうしたらいいのだ。なにを心の支えに生きていけばいいのだ。
突然の出来事に、藤孝は呆然と雨のそぼ降る梅雨空を見やった。
「武衛屋敷に駆けつけなくてよろしいのですか？」

いま一人の家来が聞く。
「いまさら駆けつけてどうなる」
三好党の餌食になるだけだ。
「では、どうなさいますので？」
そうだ、そのことを考えねばならぬのだ。
青龍寺城付近三千貫の地は回復して六年になるとはいえ、それまでずっと三好党に蹂躙されていた。三好党は今日、白昼堂々と将軍を弑逆した。松永弾正久秀勢と三好党の兵は一万五千。手兵は五十に満たない。戦うどころではない。といって三好党に尻尾を振るつもりもない。ということは……、
「青龍寺城付近三千貫の地はもはや三好党に奪われたも同然だ。それゆえにといっていいだろう、余はこれから先おぬしらを養うことができない」
付き従っている二十数騎の家来をはじめ、五十に満たない家来は、ほとんどが青龍寺城付近三千貫の地を回復してから雇い入れた近郷の地侍である。
「遠慮はいらぬ。おぬしらはこれからすぐに青龍寺城に戻り、身辺を整理して立ち去るがいい」
一文なしになる藤孝に、どこまでも従いて行かなければならない義理はない。もとより藤孝とじめじめした関係にもない。あっさりしたもので、大半が声をそろえるようにいった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com